

アデルのことならよく覚えてい
る。カイロの日本大使館で日
本映画の上映会があるとき、決まっ
ていちばん前で見ていたのが彼だっ
た。初めて話しかけられたのは寅さ
んの上映の後だった。

「私の名前はアデルです。私は日本
語を勉強している。私はいま見た映
画について質問がある。質問をする
ことはいいですか？」

日本語を学ぶエジプト人の多くが
そうであるように、彼もまた土産物
屋でアルバイトをしていた。日本人
向けにエジプト名
物のパピルスの製
法の解説をするの
だ。

ようこそわたし
たちのみせに、お

こしくださいました。わたしはかい
ろだいがくにほんごがつか2ねんの
あでるともうします。これから、わ
たしはびるすのつくりかたについ
て、みなさまにごせつめいたしま
す……。

実際には、アデルは「かいろだ
いぐくにほんごがつか」の生徒ではな
かった。彼の日本語は日本大使館の
エジプト人向け日本語講座で学んだ
ものだった。授業料が払えなくなっ
てからは、日本人の多い安宿や、日
本映画の上映会などを利用して個人

的に日本語の勉強を続けていた。そ
のせいかアデルの日本語の語彙には
偏りがあった。

日本語を勉強するエジプト人学生
の多くは、手取り早く金になる観
光ガイドを目指す。しかしアデルは
ガイド業には興味がなかった。自分
は日本に行きたい。そのために日本
語を勉強している、とアデルはいっ
た。でも、仕事はどうするの。日本
は物価だつて高いし、外国人が仕事
を見つめるのはとても大変だよ。き
みが思っているようないい国じゃな

旅の曲者

49

アデルの作文

文・写真／田中真知
Tanaka Mochi

イラスト／bozen

いよと、ぼくはいった。

正直なところ、アデルの日本に行
きたいという気持ちの真意はわから
なかった。金目当てに日本女性との
結婚を望むエジプト人もたくさん見
てきた。ただ、アデルはほかのエジ
プト人にくらべると繊細で、他人に
対して細やかな気づかいをすること
のできる若者だった。

その後もアデルと積極的な付き合
いはなかったけれど、たまに土産物
屋などで顔を合わせた。あるとき下
町のマーケットを歩いていたときア

デルに声をかけられた。日本企業の
仕事でお客さんを案内してきたここ
ろだといった。久しぶりにお茶を飲
みながら少しだけ話をした。

「私は日本に行ったら四万十川に行
きたいです」とアデルがいった。
「四万十川？ よくそんな地名を知
っているね」

「映画で見ました」

「ナイル川とはずいぶんちがうよね」
「はい。でもナイル川もいい川です。
私のお母さんの住んでいるアシュー
トの家もナイル川のそばで店をやっ

ています。アツヨシのお母さんと同
じね」

「アツヨシ？」
アツヨシは映画に出てくる主人公
の少年らしいが、ぼくはこの映画を
観てなかったのだからない。

「四万十川の映画をみて、私は日本
人とエジプト人は似ていると思いま
した」

「……」

「なぜ黙っているのですか？」

「いや……べつに……それで日本に
は行けそうかい？」

「インシヤアツラー！（神がお望み
であれば）」

それがアデルに会った最後だった。
それから何年もたって、日本に帰
国していたぼくは意外なところから
アデルの消息を聞いた。添乗員を辞
めたあと、都内の日本語学校で教師
をしている友人の女性からのメール
の中に、あのアデルと思われる若者
のことが書かれていたのである。彼
女は書いていた。

「……私が教えたその生徒はアデル
さんといい、エジプトから2年前に
来日した男性です。驚いたのは、ア
デルさんは、私が添乗員の仕事でエ
ジプトに行ったときに知り合った日
本人ガイドのKさんやSさんのこと
を知っていたことです」

KさんもSさんもぼくの知り合い
だった。そして、ぼくがエジプトで
会ったアデルが彼らのもとに入入り
していたのも知っている。アデルと
いう名前はありふれているが、Kさ
んもSさんと付き合いのあるアデル
が何人もいるとは思えない。彼女の
メールに書かれていたアデルは、間
違いなく、あのアデルだった。とい
うことは、彼は念願かなって日本に
やってくる事ができたのだ。彼女
は、ぼくがアデルと知り合いだとい
うことは知らない。メールはさらに



カイロの香辛料市場で見かけた兄妹。エジプトでは、あらゆる種類の香辛料が手に入る

続いていた。

「先日は学校の卒業式でした。エジプトのアデルさんも卒業生の一人でした。私のクラスでは卒業生たちは卒業にあたって文集をつくるのですが、じつは今回メールしたのは、そのなかでアデルさんの書いた作文がすごくよかったです。ところどころ変なところもありますが読んでみてください。私はとても幸せな気持ちになりました」

メールに付されていた作文を一読した。彼女のいうとおりだった。こんなにあったかくて幸福な作文は読

んだことがない。卒業したアデルが、その後なにをしているのかわからない。けれども彼ならきつと大丈夫だと思おう。そう思いながら、なんどもアデルの作文を読み返した。

確かに私は日本が大好きな人だ。日本に来る前にも日本が大好きだった。何で私は日本が好きなのか、何で日本語を勉強したいと思ったのか、実はそれについて私もわからな

のが夢だった。そして初めて日本に来た時、まるで天国に行くのと同じ感じだった。飛行機の窓から日本が見えた時、私の目は日本の島から離れなかつた。一秒でも無駄にしないようにずっと見つづけた。

日本の道を歩いた時、まるで夢の中にいた。周りはみんな日本人だし、サインとかも日本語で書いてある。やっぱり夢じゃない、実際に日本にいるとわかって、説明できないぐらいのいい気持ちの中で流れていた。それは日本に来た時の一回目だった。どれぐらい感動したのか、あく本当に夢よりずっと良かった。またいつかこの大好きな国に戻れると感じた。ただ、必ず戻るとしても強く感じた。

それで一年後、学生として戻ってきた。また、全く同じいい気持ちが強

も、今、私は日本にいるということ

を考えるととても嬉しい。生活は辛い。日本の社会は冷たい社会だ。なかなか日本も近付いてくれない。外国人のことを馬鹿にしている人も少ないとはいえない。本当の友達もいない。いつか病気になる、誰も助けてくれないかもしれない。日本語もあまり勉強する時間もない。日本語を使って話すチャンネルもあまりない。アルバイトをしないと学費を払うことさえできなくなる。つまらない、厳しい、寂しい。でも私は日本にいたいことを考えると、すぐ気分が良くなる。幸せ、そんな気持ちですぐ流れる。神様にとっても感謝している。いつかこの国で成功する日が来ると強く感じている。確かに私は日本が大好き。私の見た夢の中にいる。実際にいる。神様、私の夢をかなえてくださって、ありがとうございます。最後まで助けてください。日本と日本人もっと好きになることも、そして、日本も日本人も私のことを好きになるようにお願いします。日本、大好きです。



田中真知

たなか まち

【プロフィール】1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に「アフリカ旅物語（北東部編・中南部編）（凱風社）」、「ある夜、ピラミッドで」（旅行者）、「訳書にグラハム・ハンコック」（神の刻印）（凱風社）、「惑星の暗号」（翔泳社）など。